

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第202号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2020年12月21日

ヘラシギ



2020. 9. 6 石狩浜

撮影者 鈴木 幸 弥 (札幌市中央区)



も く じ

函館鳥通信④ 秋更くるイチイなる

バードリサーチ 三上かつら	2
鳥獣保護管理法を読み解く－現在の狩猟とは?－(その3)	
国立研究開発法人 森林研究・整備機構フェロー 川路 則友	4
ドキュメンタリー番組「たづ鳴きの里」で伝えたかったこと	
HTB北海道テレビ 報道部 沼田 博光	6
けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ～ロシアの南下と小林一茶の時代～	
札幌市中央区 國本 昌秀	8
小樽市銭函におけるヒメハマシギ <i>Calidris mauri</i> の記録	
北海道大学農学部4年 千葉 利久	10
野鳥情報コーナー	
函館山でヒメイソヒヨ初記録 北斗市 佐藤 理夫	11
石狩浜でコモシギ 石狩管内当別町 道川富美子	11
探鳥会ほうこく	12
探鳥会あんない 鳥民だより 表紙の鳥	16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

函館鳥通信④

秋更くるイチイなる

バードリサーチ 三上 かつら

北海道ではいつからが秋なのでしょうね？道南では8月にはムシクイ類などが“秋の渡り”で通過していき、ずいぶん長く秋を目にするように感じます。この記事が出るころには、紅葉が終わった葉が落ち、日没が早くなり、小鳥類が少なくなつて、霜が降りて、風が冷たくなつていくことでしょう。宮崎という全国有数の日照時間を誇る県で生まれ育った私にとっては、太陽をもっとよこせと言いたくなる時期です。そんな晩秋の灰色の景色に、ナナカマドやイチイの赤い実が可愛らしく色を挿してくれるのをみると、少し嬉しくなります。「函館市の木」はイチイで、イチイは耐寒性・耐雪性にすぐれており、庭木や街路樹にも数多く使われています。また、材



写真1. イチイを啜ったヤマガラ。イチイの横枝に仮種皮が張り付いている。

としても耐久性や弾力性があることから、多くの道具や工芸品にも用いられてきました。ですがそれだけではなく、ひょっとしたら私と同じように、その実が可愛らしい彩りだと感じた人がいて、函館にイチイをたくさん植えてきたのかもしれない。

このイチイの実を食べるのがヤマガラです。最盛期にはひっきりなしにイチイにやって来て赤い実をもぎ取り、処理をしやすい横枝まで運んでくると(写真1)、実を足で押さえて、くちばしでガンガンつついて割って食べたり、種子をどこかへ運んで行って隠したりしています。面白いので毎年観察しています(過去に野鳥誌に記事を書いたことがあります；三上 2019)。道南の平地の公園だと、イチイが結実するのは9月下旬ごろから11月くらいまでの間ですが、10月半ばごろからヤマガラが山からおりてきて、よく見られるようになります。過去に、榊原茂樹氏がこのヤマガラによるイチイの採食行動を精力的に調査した論文を発表しているのですが(榊原 1989)、種子は樹木の根本や倒木、地面などに埋められているようです。そういった場所で稚樹も見られるようなので、ヤマガラが埋めた種子の一部はおそらく掘り出されずにそのまま春を迎え、芽を出すのでしょうか。ヤマガラは自分のためにせつせと種子を隠しているのですが、自分では動くことのできないイチイに種子を運ばされているともいえます。

ちなみにヤマガラは「函館市の鳥」です。あまり注目されてはいないのですが、市立函館病院にいくとヤマガラをあちこちで見かけます(写真2)。なぜヤマガラが函



写真2. 市立函館病院の壁面に描かれたヤマガラ。ちょっとお顔が違う…?

館市の鳥に選ばれたのか、以前、函館市博物館学芸員の佐藤理夫さんにお尋ねしてみたことがあるのですが、イチイが先に決まっておられ、函館山でイチイを食べるところがよく見られる鳥、ということでヤマガラになったのだそうです。

ヤマガラ以外でも、スズメも時々イチイの実を食べます。イチイの種子には毒があることがよく知られていますが、スズメが食べていたのは赤い実の部分です。この部分は仮種皮といって、一般的な果物のおいしい実の部分（ミカンやカキでは子房、リンゴやイチゴでは花托）とは異なりますが、うっすらと甘い味がします。私も実際に舐めてみました。スズメはイチイを常食はしないのですが、すぐにその理由がわかりました。ベトベトするのです。それでスズメは、くちばしはつけるものの、ベトベトを振り払うのに難儀します。ときにはあちこちにそれを擦り付けていくこともあります（写真3）。メジロでも同じようにイチイの仮種皮にくちばしを突っ込んだあと、ベトベトに苦労しているのを見たことがあります。哺乳類ではエゾリスがイチイの実を食べることがあ

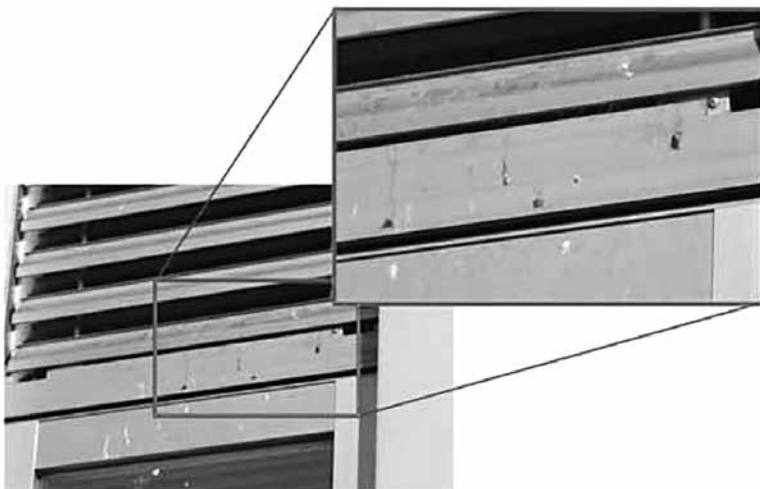


写真3. 換気口に入入りしているスズメがイチイを擦り付けて行った痕跡



写真4. 雪の日にイチイに群れるスズメ

りますが、こちらもヤマガラほどの食べっぷりではなく、やはりクルミのほうがお好みようです。赤い実ではありませんが、エゾシカがイチイの樹皮を剥いて食べてしまうことも知られています（小島 1999）。

ある年の冬の間、函館駅周辺に設定したルートを定期的に歩いて出現する鳥を調査していたところ、街路樹として植えられたイチイの低木でスズメがよく観察されました（写真4）。イチイは常緑針葉樹なので、厳冬期になってあたりが雪に覆われても、スズメたちが隠れたり、風をよけたりする場所になっているにちがいありません。くわえて、街路樹の真下は舗装されておらず、土が露出していて、何か餌がとれるかもしれません。

この調査では、イチイを含む1本が約3kmのルート4本においてルートセンサスを行い、1本のルートごとにスズメの全羽数と、その中でイチイで見られた羽数を数え、イチイにいたスズメの割合（%）を調べました。これを12-2月に月1回ずつ、計3回ですから、延べ12本になります。それにより、ルート1本あたり、そのルートの中の全部のスズメのうち、平均で約33%（0-100%まであり）がイチイにいたという結果が得られました。これを多いと思うか少ないと思うか、というのは感覚の問題かもしれませんが、函館駅周辺のスズメにとって、イチイは、貴重な餌資源というよりは、冬の間の一時的ではあっても大事な居場所を提供しているのではないかと考えています。

引用文献

三上かつら 2019. ある秋の日のヒトとヤマガラとイチイ. 野鳥2019年1月号.
 榊原茂樹 1989. イチイ *Taxus cuspidata* S. and Z.の種子散布におけるヤマガラ *Parus varius* T. and S. の役割. 日本林學會誌 71(2): 41-49.
 小島康夫 1999. 北海道におけるエゾシカ食害とその防除法. 森林防疫 48(11):201-209.

鳥獣保護管理法を読み解く

—現在の狩猟とは？— (その3)

国立研究開発法人 森林研究・整備機構フェロー 川路 則友

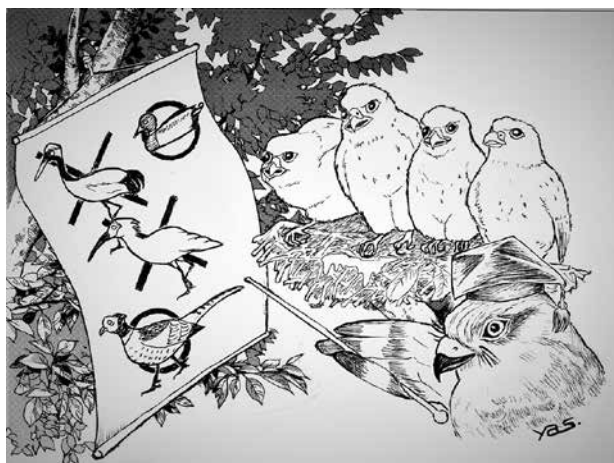
<狩猟の方法は決められている>

この鳥獣保護管理法でいう「狩猟」とは、「決められた方法（法定猟法）を使って、決められた狩猟鳥獣の捕獲をすること」です。法定猟法とは、大きく「銃器」「網」「わな」の3種類に分けられます。ただし、「網」のうち「かすみ網」は、目的とする狩猟鳥だけでなく、無差別にほかの鳥も大量に捕獲されることから、鳥類の保護繁殖に重大な支障があるとして禁止されています（使用禁止猟具）。ただ例外的に、捕獲して識別用の足環を付けた後に放鳥することにより、渡り鳥の渡り経路、寿命等に重要な知見をもたらす鳥類標識調査（バンディング）などの学術研究目的には、許可を得ると使用が認められます。また鳥類の捕獲には「わな」を用いてはならない、「つりばり」や「とりもち」を使ってはいけない、弓矢を使ってはいけない、キジ笛を用いてはいけない、ヤマドリおよびキジの捕獲のために誘引としてテープレコーダー等を使用してはいけないといった具体的な例を挙げて禁止しています。さらには、爆発物、劇薬、毒薬を使用する猟法は、「危険猟法」として禁じられています。

<「猟法」の微妙な解釈!>

さて、このように法律には具体的に禁止猟法を明記してはいますが、ではそれ以外だったら大丈夫、とも解釈できます。ここが微妙なところ。実際、それ以外のさまざまな方法で狩猟鳥が捕獲される例がかなり多いようです。その一つに「鷹狩り」があります。これは、鷹匠がタカを調教し、狩猟期間中に狩猟鳥を捕獲させるものです。

もちろん、日本産のタカを捕獲して調教するのはもってのほかですが、外国産のタカを用いる方法は、具体的に使用を禁止されている猟法でもありません。ただ、「鷹狩り」でも、狩猟鳥以外の鳥類を捕獲すると、当然、その時点で法律違反になります。タカに目の前の対象物が狩猟鳥かそうでないかを見分ける能力があるわけではないので、場合によっては難しい局面に立たされる鷹匠が現れないとも限りません。その昔、某TV番組で、ある鷹匠を紹介していました。たまたま狩猟期間中で、タカを飛ばして捕らえた鳥を得意げに見せていました。本人は狩猟鳥であるタシギだと言っていました。どうみてもタシギのオスでした。のちに番組関係者に聞くと、放映直後に野鳥の会会員からかなりの抗議電話がかかったということでした。



「(鷹狩り候補生養成所) あなたたち、将来日本で鷹狩りするかもしれないから、しっかり覚えておくのよ」
(イラスト 本間康裕)

<狩猟期間、場所は限られる>

この法律の定義によれば、「狩猟期間」を北海道では毎年9月15日から翌年4月15日の間で、狩猟鳥獣の捕獲等を行うことができる期間としています。なんと、7カ月間です。いつも言われている狩猟期間よりかなり長いのでは？と思われるかもしれませんが、これは、原則的に鳥の増殖に影響を及ぼす期間（繁殖期）には狩猟は行わない、というのが根底にあるのだらうと思います。現在の実質的な狩猟期間は、施行規則に「捕獲等を行う期間」として、北海道では毎年10月1日から翌年1月31日まで、とされています。

また法律では狩猟をしてはいけない場所が具体的に規定されています。たとえば、鳥獣保護区、休猟区、公道、国立公園の特別保護地区、社寺境内、墓地などです。また銃を用いた狩猟に関しては、日出前及び日没後はダメ、住居が集合している地域又は広場、駅その他の多数の者の集合する場所ではダメ、弾丸の到達するおそれのある距離に人、ペット、建物、乗物（自動車、電車、船舶など）がある場合はダメです。それらを除いた区域を狩猟可能区域と言いますが、その土地をよく知らないと大変です。各都道府県では、「鳥獣保護区等位置図」を発行しており、北海道のものはインターネットでもダウンロードして見ることができます。北海道は狩猟できる区域がまだ広いのですが、都道府県によっては、禁止区域だらけで、狩猟できる区域が非常に少ないという場合もあります。

＜狩猟免許とは＞

法定猟法を用いて狩猟を行おうとする者は、すべて都道府県知事の免許が必要となります。免許は使用する猟法により「網猟免許」「わな猟免許」「第一種銃猟免許」「第二種銃猟免許」の4種類です。後ろの2種類の違いは、火薬を使う銃か、空気銃かの違いによるものです。いったん取得した免許は3年間有効となっています。ただし、実は法定猟法以外で、禁止されていない猟法を使う場合は、免許は不要とも読み取れます。つまり、網（この場合、かすみ網も含む）や銃を使わず、「危険な猟法でもない方法」で、「狩猟期間中」に、「狩猟可能区域」で、「狩猟鳥」を捕獲することは、届け出る必要もないし、免許もいらないうことです。ただ、前述のように、捕獲禁止や制限の詳細はじゅうぶん知っておく必要はあります。

＜狩猟鳥は飼育できる？＞

少し前になりますが、芸能人のモト冬樹氏が、カラスに襲われそうになっていた子スズメを保護し、そのまま8か月以上も自宅で飼っていたことがばれたとの記事がネットを騒がせました。東京都の担当部局からはすぐ放すように指導され、天敵の多い野外にいきなり放すのは可哀想、などの同情論で一時期、世間が賑わいました。スズメは狩猟鳥ですので、法律に基づいて生きたまま捕獲することは違法ではありません。ただ、ネットの記事によれば、モト冬樹氏は2017年の6月に子スズメ（幼鳥）を保護したと断言しています。つまり、狩猟期間（本州だと、11月15日から翌年2月15日）ではない時期に捕獲したのは明らかです。ですから、これはその点からみても違法です。モト冬樹氏が、もし狩猟期間中にあのスズメ（もうすでに子スズメではない？）を合法的な手法で捕獲していたなら、そのままずっとペットとして飼っていても違法にはならなかったのではないかと、思います。もちろん、野生の鳥をペットにするなんて、という感情論が出ることは重々承知ですが。

＜狩猟には制限が多いし、金がかかる。なのに…＞

実際に「狩猟」を行おうとすると、意外と制約が厳しいことがわかります。また最近では警察の取り締まりが強化されたことから、銃猟免許を取る人数がなかなか増えないようです。まず狩猟免許をとるためにはお金が必要です。免許が下りると、猟銃や空気銃を所持する際にはその許可申請にお金がいります。さらには、自分が狩猟しようとする都道府県に対して狩猟税を支払わねばなりません。また、万が一のためにハンター保険に加入する場合もあるでしょう。ネットで調べると、猟銃による狩猟を始める場合には、最低11万円くらいはかかるかと書いてありました。またそれには猟銃の高額な購入費用は入っていませんので、まったくイチから始める場合は途方もない費用がかかることを覚悟なくてはなりません。それでいて、期間、区域、捕獲数、種類が限られるので、あまり割に合わない趣味なのか

もしません。私が小さいころは、近所に狩猟者は普通にいましたし、毎年どこからか、捕られたカモやキジのお裾分けが我が家にもきていたものです。また私が鳥の研究を始めたころは、地方の野鳥の会で重鎮と言われる方々の多くが、若いころに狩猟を経験しておられ、また狩猟をやっていたからこそその野生鳥類への知識が非常に豊富でした。今のようにあらゆる情報が手軽に入手できるような時代ではなく、その方々とお付き合いをさせていただくことによって、文献の乏しい知見からでは得られない、貴重な生きた知識をずいぶん勉強させていただきました。

＜狩猟データは意外と使える場合も…＞

北海道には本来生息せず、放鳥された個体が細々と生き残っているだけと言われるヤマドリですが、私は10年間ほど、本州でその生態を研究したことがあります。この鳥は、隠れるのが上手で、キジのような甲高い声を出すわけでもないので、野外で観察するのが非常に難しく、出会うことはめったにありません。したがって、野生個体の数を調べるのは至難のわざなのです。ですから、数が増えているのか減っているのかさえ、本当のところわかりません。ただ、この鳥はかなり昔から狩猟鳥とされているので、その捕獲数の推移に関しては、連綿と資料が残っています。実際に、見つけにくい鳥ですので、多くの狩猟者は猟犬を用いて、嗅覚で見つけ、飛び立たせて捕獲します。もし、この日本固有種であるヤマドリの数が少なくなったとして、狩猟鳥から外された場合、それこそ、そののちさらに減ってきているのか、回復しつつあるのかは、まったく分からなくなってしまいます。おかしな論理と思われるかも知れませんが、狩猟鳥として指定されているからこそ、その鳥の生息実態がなんとなくわかっていくという利点もあるわけです。2013年にウズラが狩猟鳥から外されましたが、それまでは狩猟統計というかたちで、個体数の年変動が間接的にしろ、漠然と追っていました。しかし、現在はまったく狩猟が行われなくなり、さらには追跡調査もなされないために、ウズラの現状はほとんどわからなくなってしまっています。もちろん、国の肝いりで、ウズラの生息実態調査を定期的に行えばいいのですが、予算の関係でまず実現しそうにありません。狩猟鳥から外しておけば、知らないうちに個体数が回復しているだろうという行政機関の希望的観測だけが見え隠れして仕方ありません。

以上、3回シリーズにわたり法律の中身について、紹介ならびに手前勝手な持論を展開してきましたが、皆さんもこれを機会に、本来は身近なはずの「鳥獣保護管理法」に親しみ、我が国で生活する野生鳥類の保全について再認識していただければと思います。

(終わり)

長沼町の舞鶴遊水地 100年ぶりのタンチョウ繁殖 ドキュメンタリー番組「たづ鳴きの里」で伝えたかったこと

HTB北海道テレビ 報道部 沼田博光

<農家の夢が実現する奇跡を長期取材>

明治の開拓で100年以上も前に姿を消したタンチョウを、もう一度、空知管内長沼町に呼び寄せようと奮闘する農家の活動に密着したドキュメンタリー「たづ鳴きの里～タンチョウを呼ぶ農民たちの1500日～」を今年6月に放送しました。ツルを呼ぼうとした土地は手付かずの自然が広がる湿原ではなく、洪水対策として人工的に造られた舞鶴遊水地。ふだん空き地となっている場所に池を掘り、ヨシを植えるなどしてかつての湿地を再生し、人々の暮らしの真ん中に、タンチョウのための箱庭を作ろうという世界的にも例のない試みでした。同じ町民にまで笑われた“農家の夢”がやがて現実となり、そして実に100年ぶりにつがいヒナを孵したという奇跡が起きます。私たちは箱庭づくりが始まった5年前から撮影を始め、農家の皆さんの悪戦苦闘ぶりと、タンチョウの飛来とを一緒に一喜一憂しながら映像に記録し続けました。遊水地に来る4万羽の渡り鳥は圧巻でした。チュウヒが舞い、オジロワシとオオワシが氷上で魚を奪い合うシーンを札幌近郊で目の当たりにするとは思いませんでした。放送までの舞台裏を紹介します。



繁殖に成功したタンチョウのつがい

<きっかけはフランス国営テレビからの照会>

取材のきっかけは実は海外からのオファーです。2015年にフランスの国営テレビからタンチョウを取材できないか？と協力を求められました。以前、国際部に在籍し、海外に番組や映像を販売したり、国際共同制作を目指して欧米のテレビ局に企画提案などをしてきた繋がりから、フランスTVのプロデューサーで、映画「WATARIDORI」にも関わった人物から「次はタンチョウで『WATARIDORI』を作りたい。富士山をバックに飛ぶタンチョウを上空から撮影したいんだ」と言われました。「WATARIDORI」は渡り鳥の有精卵を確保して孵化からスタッフが親代わりに育て、小型軽量飛行機と一緒に飛びながら撮影した映画です。私は「そりゃ無理だ！」



孵化した2羽のヒナ

と笑いながら一蹴しましたが、ただ日本人なら絶対に考えない、その自由な発想に驚き「無理だけど、まあ念のために調べてみるよ」とリサーチを始めたわけです。

私はタンチョウ取材の経験はなかったのですが、専門家に次々お話を聞くうちに、ほどなくこの分野の第一人者、専修大学北海道短大の名誉教授、正富宏之先生に辿り着きます。そして正富先生も他の先生たちと同じく一笑に付されるかと思いきや「今は無理だけど、そのうち長沼でできるかもしれないよ」と、ツルを呼び戻す長沼のプロジェクトについて教えてくれました。その内容に驚き、ドキュメンタリスト魂に火がついて、フランスTVを丁重に断りつつ、私の長沼通いが始まりました。

<最初の2年間はひとりでこつこつ>

初期の取材はツルを呼び戻すプロジェクトの会議が中心。休みやシフトの合間を利用して、一人でデジカメを持って役場を訪れ、傍聴したり町長と雑談したり。「ほんとうに来たらいいですね～、素敵な話ですね～」と私自身もそんな感じでしたが、そのうちタンチョウが本当に現れます。遠くにいるのを見つけても私の小型のデジカメではどうにもならず、カメラマンを手配しなければなりません。ところが報道部ではネイチャー系の取材手配が最も困難。タンチョウが来るかどうか分からない段階で、百歩譲ってタンチョウが来たとしても、スタッフが到着して撮影できる保証がありません。そんな事情でカメラ出動を依頼しづらく、2016～17年は我慢が続き、歯がゆい思いもしました。そこでちょっと作戦を練りました。「海外販売できる北海道の美しい田園風景を撮影しよう！近い長沼が最適。お願いできる農家の心当たりもあります」そんな企画を通し、2018年からは(後の番組主人公となる)「タンチョウを呼び戻す会」の加藤幸一會長の農作業と遊水地の実風景を4K映像で撮りためることが可能になりました。

<配慮と苦心のタンチョウの撮影>

そこからは、かなりの頻度で長沼に通いました。舞鶴遊水地を管理する道開発局札幌開発建設部に通年の取材許可を得て、タンチョウがいる場合は基本的に車の中からの撮影、間違っても私たちの取材がマナー違反と指摘されることがないように心掛けました。4Kカメラは大きく、車の中では組み立てても撮影も大変です。組み立てて準備が整う頃に飛び去ってしまうということはしょっちゅうでした。近くにコンビニもトイレもなく、吹雪の中、トイレを我慢しながら何時間もさらされることもありました。空振りが続くと帰りの車内はちょっと重い空気になったのを思い出します。ドローン撮影は特に気をつけました。正富先生の調査に同行して先生の指示に従って撮影しましたが、スタッフだけの時はタンチョウそのもののドローン撮影は控え、タンチョウが別の場所にいるのを確認してから遊水地などの撮影を行いました。



車内からの4Kカメラ撮影

番組には出てきませんが、やはり一部のアマチュアカメラマンの中にマナーの悪い人はいました。田んぼの中に2羽がいて、公道ではない畦に車を乗り入れ、四方からカメラマンがタンチョウを狙うという場面に出くわしたことがあります。2羽が嫌ってその場から数百m移動したのですが、皆さん一斉に車に乗り込みカーチェイスのように追いかけて始めました。これはいつか大きな事故を招くと感じ、私たちは「長沼に珍しくタンチョウがいます」というストレートなニュースの放送はせずに、町民の「タンチョウを見守る」活動をメインにとりあげ、「優しく、そっと見てほしい」という会のメッセージを伝えるようにしました。会のメンバーは「カメラマンが追いかけて、タンチョウのヒナが死んだむかわ町の悲劇を繰り返さない」とよく言っていて、むかわ町や佐渡まで行って、どのように保護・保全を進めるか、どのように野生生物と向き合うか勉強会を重ねていました。見回りなど彼らの地道な努力の結果、タンチョウが飛来し始めた頃によく見られたマナー違反は、今は少なくなっていると実感します。

5年にわたり長沼に通い、来るか来ないかわからないタンチョウの撮影を続けられたのは長沼ののんびりとした田園風景、そして会のメンバーの皆さんのお人柄、魅力に尽きます。中華料理屋さんでの番組シーンは私が最も好きな場面の一つです。渡り鳥の食害で秋撒き小麦がすっかり食

い荒らされても「鳥の取り分だ」と笑いながら話す皆さんを見て、なんて素晴らしい考えだろうと感動しました。



「鳥の取り分」を語るタンチョウを呼び戻す会

<暮らしの中での自然再生を願って>

私はそれまで知床のサケやヒグマなど自然や環境をテーマにした番組を手掛けてきましたが、番組の最後は必ず「今、この動物たちは大きな試練にさらされている」的なコメントが出てきて、人間による生息環境の破壊の場面が出てくるパターンにうんざりし、作るたびに無力感に苛まれていました。何をどう伝えたらよいのか、人はどう生きたら良いのか、そんな答えの出ないテーマに悩みながら、オオジシギの北海道とオーストラリアの渡りを取材している時に、アイヌの男性から「アイヌは風が吹いて鳥が飛んでいけば、それだけでその地がハッピーだとわかる。人も鳥も大地もみな隣人だ。良き隣人であることが大切だ」という言葉を聞いて、気持ちががすっと晴れるのを感じました。人が住むすぐその隣に、私たちが気を払わないだけで、様々な隣人が息をひそめて暮らしているという当たり前のことに今更ながら気づき、人々の暮らしの中での自然再生

を番組にできないかという思いに至りました。

長沼町のプロジェクトを正富先生に教えて頂いたとき「タンチョウが来なくても番組ができる」と直感しました。



番組協力の正富宏之専修大学
北海道短大名誉教授

自然破壊だと大反対の末に潰れた千歳川放水路計画の代替案として進められた千歳川水系遊水地計画。6つの遊水地が造られ、その第一号となる舞鶴にツルを呼ぶというプロジェクトは、「人と野生の共生」を描くのに最も良いテーマだと感じたのです。嬉しい誤算だったのは、番組が仕上がる直前にヒナが孵ってしまったことです。無理くりでも番組内に取り込みたいとラストシーンに慌ててヒナのシーンを入れましたが、もっとしっかり紹介したかったというのが本音です。それから長沼に続いて遊水地が完成した千歳、北広島、南幌、江別、恵庭の皆さんが番組を見て、「長沼に続け。わが町にもツルを！」という声が上がらないかしらと少し期待しています。

けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ ～ロシアの南下と小林一茶の時代～

札幌市中央区 國本昌秀

<ロシアと日本を結ぶ雁の道>

北緯64度、ロシア極東のチュコト半島アナディール低地。シベリア北極圏の入り口にある広大なツンドラ地帯に、マガンの繁殖地がある。渡りルートの解明を目的とする「雁を保護する会」とロシア科学アカデミーによる初の日ロ共同調査が行われたのは平成3年（1991年）夏のことであった。マガン16羽が捕獲され、首環が装着された。このうち1羽が秋の北海道美瑛市の宮島沼で確認され、ロシアと日本を結ぶ「雁の道」の一端が初めて明らかになった。



チュコト半島アナディール低地



マガンの日ロ共同捕獲調査

翌年、より本格的な調査が行われ、捕獲した67羽のうち11羽が国内で確認された。その模様はドキュメンタリー番組「4000キロ雁渡る～小さな沼とシベリアと～」として、テレビ朝日系列で全国放送された。ディレクターであった私は番組のテーマを小林一茶の俳句を引用することで表現した。

けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ

江戸時代の文化9年（1812年）、50歳の円熟期にあった一茶が詠んだ一句である。私がこの句と出会ったのは、山階鳥類研究所所長や日本野鳥の会会長を歴任した黒田長久博士が書いた一文であった。「一茶の“今日からは日本の雁ぞ楽に寝よ”の心こそ日本人の鳥への想いであってほしい」（1989.鳥の日本史 新人物往来社）。当時、私は番組の下準備として、マガンの渡りルートや日本人と雁に関する文化的な資料を収集していた。雁は万葉集が編まれたころから、秋になると「常世」（理想郷）から来るとされ、哀愁を込めた鳴き声、さおになりかぎとなって飛ぶ姿、落ち穂をついばむ情景などが、好んで詩歌や絵画のテーマとなった。雁は、日本人の暮らしのそばで、心の琴線に触れ

る鳥であった。しかし、戦後の高度成長で雁が暮らせる水辺や採餌環境は列島各地で喪失していく。東京湾に雁が渡って来たのは昭和42年（1967年）の19羽が最後であった。一茶の詠った「日本の雁ぞ楽に寝よ」とは、小さな命の一つひとつに慈愛を込めた一茶らしい措辞であり、「雁と人が共に暮らせる環境を次代に継ぎたい」という番組テーマに沿ったものだった。

さて、一茶が「今日」と「日本の雁」を強調したのはなぜだろうか。それは、雁は「常世」からではなく、異国から来る、すなわち「我が国・日本」という意識を持っていたからであった。俳人・一茶は雁が渡って来る日本の北方に「ロシア」があることを確かに知り得ていた。その理由と時代背景を記していく。

<長崎滞在で得た一茶の国家観>

一茶は30歳の寛政4年（1792年）、江戸から西国行脚の旅に出て、翌年長崎に滞在した。そこで唐人を目撃し、キリスト教の残影にも触れた。そのインパクトは強く、徳川治世の天下泰平を「君が世」と詠嘆するほどであった。

君が世や唐人も来て年ごもり

君が世や茂りの下の耶蘇仏

一茶は長崎滞在で、自国と異国を対比することで日本の優位性を強く意識した。これが後年、日本とロシアを対比して我が国を詠嘆する素地になったとされる。一茶が長崎にいた時期、日本はロシアとの向き合いを強いられていた。寛政4年（1792年）、日本との通商を求めるロシア使節のラクスマンが漂流民・大黒屋光太夫を伴って、根室に來航する。幕府はラクスマンを松前に留め置き、通商を拒絶した。光太夫は寛政5年（1793年）に江戸に移送され、將軍・徳川家斉に謁見した。幕臣からはロシアの国情を執拗に訊かれた。「雁は年中いるのか」といった問いもあった。この謁見に先立つ7年前の天明6年（1786年）、幕府の蝦夷地検分隊の一員として択捉島に入った最上徳内がロシア人イジュヨと遭遇している。ラッコの毛皮などを求めて南下するロシア人は一時、得撫島に拠点置き、隣の択捉島にも姿を見せていた。徳内は「雁は夏、どこにいるのか」と聞いたところ、イジュヨは「カムチャツカ、オホーツク辺りで繁殖し、その間の狩猟は禁止されている」と答えた。このように、雁はどこから来るのかは当時の知識層の関心事であった。徳内の体験は寛政2年（1790年）に「蝦夷草紙」として記され、いくつもの写本が江戸市中に出回った。

<句会に集まるロシア南下と蝦夷地の情報>

西国行脚を続けた一茶は寛政10年（1798年）36歳の時に

江戸に戻るが、この年に幕府が蝦夷地に派遣した近藤重蔵が択捉島に大日本恵登呂府の国境標識を据えた。ロシアに対して警戒を強める幕府は寛政11年(1799年)に東蝦夷地を松前藩から上知させて直轄とし、南部、津軽藩を対ロシア警備にあたらせた。

享和3年(1803年)一茶は41歳にして当代きっての俳人であった夏目成美の句会「隋齋会」に参加を許された。これは、江戸で俳諧師として認められたことを意味する。この年に一茶が詠んだ句。

初雷やえぞの果てまで御代の鐘
是からは大日本と柳哉

南下するロシアを意識し、最前線となる蝦夷地に日本の治世が及んでいることを強調する句である。夏目成美のもとには、地方に住む門人や弟子から多様な情報が寄せられた。100万都市の江戸は歌舞伎、浮世絵、落語、花火、寿司など庶民文化の爛熟期を迎えていた。全国を結ぶ道路網も発達し、地方の情報は書簡として、飛脚便が運んだ。日々の世情に強い関心を持っていた一茶に、蝦夷地や南下するロシアの情報を伝えたのは、句会で親交を得た奥州白石の俳人・松窓乙二だといわれている。乙二は弟子がいる箱館と松前に渡航し、長期の滞在もしている。

<ロシアを諫める一茶の句>

文化元年(1804年)9月にはロシア使節のレザノフが長崎に入港する。元軍人のレザノフは、カムチャツカや当時ロシア領であったアラスカを拠点にした国策交易会社「ロシア・アメリカ会社」の総支配人であった。日本に食糧補給基地を置くことや、日ロ双方の産物を売買する通商を求めた。幕府は右往左往し、レザノフは半年間留め置きされたうえ、通商拒否・国外退去となった。大騒動は広く流布されたのだろう、この年に一茶が詠んだ句は、初めて「おろしあ」という国の名を挙げて、相手を諫めるものであった。

神国の松をいとなめおろしや舟
春風の国にあやかれおろしや舟

レザノフ退去に対する報復として文化3年(1806年)9月、ロシア軍艦が樺太南部の松前藩施設を襲撃した。一茶はこの年の12月、予定されていた句会を延期して、漂流民・磯吉を囲む会に参加している。磯吉とは寛政4年(1792年)に大黒屋光太夫と共にロシアから帰国した漂流民のひとりであった。一茶のロシアに対する関心の強さを物語っている。

ロシア軍艦は、文化4年(1807年)には択捉島の幕府施設を襲撃した。幕府は3,000名の兵を蝦夷地に急派し、これまでの東蝦夷地に加えて、西蝦夷地も直轄化した。ロシア船打払い令も出して、各地に警備所を増設した。文化8年(1811年)、国後沖を測量し、上陸したロシア軍艦の艦長グローニンを日本側が捕えた。報復として文化9年(1812年)、国後沖で水産物を運んでいた豪商の高田屋嘉兵衛の船がロシア軍艦に拿捕され、嘉兵衛はカムチャツカに連行される。

<日ロ関係の変遷と、雁の道>

一茶が「けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ」を詠んだのは、嘉兵衛が捕まった文化9年(1812年)のことであった。この句は日ロ関係の緊張時に、庶民文化が隆盛する「泰平」な日本の優位性を、雁への慈愛に寄せて詠ったものであった。一茶は熱心な浄土真宗の信者であり、徳川治世に加えて、日本こそ浄土という意識があったのかもしれない。



宮島沼の雁行



宮島沼で確認された標識マガン

この俳句が詠まれてから180年後、日ロ初の共同調査で「雁の道」が繋がった。チュコト半島アナディール低地はベーリング海峡を挟んでアメリカのアラスカと向き合う国境地帯で、外国人の立ち入りが長年禁じられてきた。ペレストロイカに続くソビエト連邦崩壊(1991年12月)という歴史の大きなうねりが、日ロの研究者をマガンの絆で結び、不可能とされてきた調査を実現させた。繁殖地、渡りルート、越冬地のいずれの環境も「泰平」で、関係国の連携がなければ、雁のいのちは継がれない。

天明6年(1786年)、択捉島で最上徳内はロシア人イジュヨと友人関係を築くことで、国情、文化など様々なことを聞き取った。カムチャツカの北に「チュウキチ国」があり、「アナアデリ」という大河が広がることも知る。このチュコト半島アナディール低地こそ、ロシアから日本に渡って来るマガンのふるさとのひとつであった。

見事な編隊を組んで飛ぶ雁は、絆を象徴する家紋の意匠にもなっている。人に国境はあっても、渡り鳥に国境はない。この視座を一茶が持ち得たとしたら、果たして「けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ」は、いかに詠まれたことであろうか。

(参考文献)

- 黒田長久 1989. 鳥の日本史. 新人物往來社.
青木美智男 2013. 小林一茶 時代を詠んだ俳諧師. 岩波書店.
中田雅敏 2009. 漂泊の俳諧師小林一茶. 角川書店.
吉田常吉 1965. 蝦夷草紙. 時事通信社.
井上靖 1974. おろしや国酔夢譚. 文藝春秋.
磯田道史 2017. 徳川がつくった先進国日本. 文藝春秋.
北海道の歴史 1981. 榎本守恵. 北海道新聞社.

小樽市銭函におけるヒメハマシギ *Calidris mauri* の記録

北海道大学農学部 4年 千葉 利久

2020年9月7日から9日にかけて、小樽市の海岸においてヒメハマシギ幼鳥1羽を観察しました(写真1左側)ので、北海道における本種のこれまでの記録と併せて報告致します。

9月7日の午前10時ごろ、小樽市銭函の砂浜で目の前に降り立ったトウネン70羽ほどの群れを眺めていると、足が明らかに長い1羽の後ろ姿が目にとまりました。はじめは体型からヨーロッパトウネンかと思いましたが、嘴を見ると明らかに長く、強い違和感を覚えました。ヒメハマシギ、ヒレアシトウネンの可能性を疑い撮影すると外趾と中趾の間にはっきりと蹼(みづかき)があり(写真1右側)、嘴がトウネンより長く先端が少し下に曲がる、といった特徴が認められました。目が嘴から離れ、頭部上側に付くハマシギに似た顔つき、嘴の太さなどからヒレアシトウネンではなく、嘴の比較的短いタイプのヒメハマシギと判断しました。羽衣は摩耗の少ない幼羽であり、この個体が幼鳥であるとわかります。



写真1. ヒメハマシギ 2020.9.7 小樽市銭函

この個体は発見から3日間、発見場所を中心に6kmほどの範囲内で砂浜を移動し、採餌していました。同一の群れにはトウネン幼鳥70羽(うちフラッグ付き2個体、カムチャツカとコムケで装着、放鳥)、ヨーロッパトウネン幼鳥1羽、ミユビシギ幼鳥2羽が交じっており、その特徴を周囲の個体と比較してよく観察できました。9月9日午前11時頃に観察したのを最後に本個体の目撃情報はなく、この時が終認であったと考えています。

ヒメハマシギは本来アラスカ西・北海岸、ベーリング海の島嶼、チュコト半島北東部に繁殖し、カリフォルニア、メキシコ湾から南米大陸北部にかけての海岸で越冬する鳥で、日本では迷鳥としてこれまで全国から記録が報告されていますが、日本鳥類目録第7版(日本鳥学会 2012)に

は北海道での記録は記載されていません。また、これまでの北海道での写真を伴った確実な記録としては、2006年9月の網走市(日本野鳥の会オホーツク支部HP)、2015年8月の根室市(山階鳥類研究所 2017)、2016年9月の石狩市(未報告。詳細以下に記載)の過去3例の記録があるのみで、今回の記録は確実なものとしては、それらに次ぐ4例目の記録であると考えられます。なお、写真のない記録としては、1985年9月の鶴川河口(羽田 1986)があります。

このうち石狩市2016年9月の記録については、未だ報告はされていないものの写真証拠等が残っているため、この機会に文書記録として残したくこの場をお借りさせていただきます。2016年9月15日、石狩市新港東側の石狩浜でハマシギ5羽の群れに交ざるヒメハマシギ幼鳥1羽が北大野鳥研究会OBの山上竜生さん、佐藤遼太郎さん、その他数名により確認されました(写真2)。周囲のハマシギより小さくトウネン大で、嘴がトウネンより長く先端がわずかに下に曲がる、といった特徴からヒメハマシギであると考えられ、肩羽、上背などの羽衣から冬羽に換羽中の幼鳥であると判断できます。



写真2. ヒメハマシギ 2016.9.15 石狩浜 山上竜生さん撮影

思わぬ突然の出会いでしたが、毎日のように灼熱の浜に通い、ひたすらシギチドリの観察を続けた夏のとても良い思い出となりました。ヒメハマシギ滞在中、発見、観察に協力していただいた方々、本当にありがとうございました。

参考資料

日本鳥学会 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.

日本野鳥の会オホーツク支部 オホーツク圏鳥類目録.

<http://www.wbsj-okhotsk.org/zukan/himehamasigi.htm>

最終確認日: 2020/10/05.

羽田恭子 1986. 鶴川の野鳥 1985(S.60 秋). 北海道野鳥だより(63): 3-6.

山階鳥類研究所 2017. 2015年鳥類標識調査報告書.

野鳥



情報コーナー

函館山でヒメイソヒヨ初記録

北斗市 佐藤 理夫



ヒメイソヒヨ 2020.5.11 函館山

2020年5月11日に、例年函館山で行っている鳥類標識調査において、ヒメイソヒヨ *Monticola gularis* (ヒタキ科イソヒヨドリ属) 1羽を初めて放鳥しました。本個体は外部形態から雄の特徴を有し、頭骨の骨化、及び虹彩色の特徴により成鳥と判断しました(山階鳥類研究所 2009)。

本種は、我が国では過去に11件の報告しかなく、迷鳥とされています(日本鳥学会 2012)。一方、北海道での過去の記録に限れば、「1986年5月 羽幌町天売島」、「2011年5月 浜頓別」、「2015年5月 礼文」の3例が記載されています(藤巻 2012および補遺)。

ところが、北海道での過去の標識調査記録を調べると、留萌管内羽幌町在住の有田智彦氏が、焼尻島で、2011年(4羽)、2014年、2015年、2016年の4年間に、いずれも5月に合計7羽を標識放鳥していました。ちなみに、北海道以外の標識放鳥例は、福岡県1カ所、新潟県3カ所の合計4カ所で7羽が放鳥されていることが分かりました。

日本での本種の記録は、沖縄県での記録を除き、そのほとんどが5月に日本海側で記録されたものであり、北海道では道北のみでの記録でした。特に2011年には、焼尻島での4羽を含め、日本全国で8羽が記録されています。この年は、本種の渡りにとって何か特別なことがあったのでしょうか？ 実は、新潟県での記録にあたり、「海上から黄砂が茶色い壁のように押し寄せてきた後に捕獲された」と報告されていることから、この年は「黄砂」の影響があったことを示唆しています。

上記の事実を除けば、本種は迷鳥とはいえ、5月に対馬暖流に押し出されるように、日本海沿いを継続的に北上しているように見えます。その点で言えば、函館山での記録は、太平洋側にずれていることで、多少イレギュラー気味のように思えます。松前岬から津軽暖流に押し出されたために、函館山での羅網となったのでしょうか？と想像を

巡らしてしまいます。

最後に、標識放鳥データの利用については山階鳥類研究所より許可を取得済みであること(許可番号:山階保全第2-92号)をお伝えし、「野鳥情報」としたいと思います。

引用文献

藤巻裕蔵 2012. 北海道鳥類目録改訂4版. 極東鳥類研究会, 美唄.
同補遺 (<http://bonasa4979.sakura.ne.jp/list.html>)
日本鳥学会 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
山階鳥類研究所 2009. 鳥類標識マニュアル(改訂第11版).

石狩浜でコモンシギ

石狩管内当別町 道川富美子



コモンシギ 2020.9.10 石狩浜

2020年9月10日、石狩湾新港東埠頭(石狩市)に隣接する海岸、石狩浜(通称:三線浜)にコモンシギ1羽が飛来していました。小雨混じりのやや風の強い朝で、しばらく滞在していたヘラシギをもう一度見たいと思って出かけた時でした。双眼鏡の中に入ったシギを見て目を疑いました。念願のコモンシギでした。

ハマシギ1羽、トウネン2羽と一緒に、海岸西端にある防波堤の近くから、弧を描く海岸線に沿って移動していました。濡れた波打ち際に近づくことはなく、波が打ち寄せるギリギリの辺りで餌を捕りながらゆっくり歩き、時々内陸側へ数mほど入っては、思い出したように海側へ戻ることを続けていました。時折、低く飛んではまた歩き出していました。雨が強くなり、防波堤の北東およそ1km辺りでやや遠くへ飛んだのをきっかけに、午前7時過ぎからほぼ1時間の観察を終えました。幼鳥でした。

コモンシギの北海道での直近の観察は2012年9月、2013年9月の石狩市いしかり調整池(石狩鳥類研究会 2020. 石狩鳥報2019)でした。それ以前には鶴川、根室、紋別コムケ湖、浦幌で記録があります(藤巻裕蔵 2012. 北海道鳥類目録改訂4版. 極東鳥類研究会, 美唄)。

(編集部より) 石狩浜では同日午前10時ころから10分間、当会会員の先崎愛子さんも観察・写真撮影しています。



半年ぶりの探鳥会に52名
いしかり調整池

2020. 9. 9

石狩管内当別町 道川富美子

新型コロナウイルスの感染予防対策で中止が続いていた探鳥会でしたが、ほぼ半年ぶりに再開となりました。青空に白い雲が飛ぶように流れ、残暑に心地良い風を感じながら、調整池を2時間かけて回りました。いつもに増して仲間達との鳥見を嬉しく楽しく感じられたのは私だけではないでしょう。

台風の影響もあって不安定な天気予報にもかかわらず、大勢の参加に、コロナ渦で参加が少ないのではとか、探鳥会の再開を知らない人がたくさんいるかもしれないとかの心配は杞憂に終わりました。コロナ対策の一環として、今回から参加時の名札（ネームプレート）とその回収を止めて、必要時には即連絡ができるような形で参加者名簿を作成することになりました。初めてのことなので戸惑いはありましたが、開始前には全員の参加者カードへの記入が済んでいたようです。



配布した透明アクリル板

探鳥会は予定通り9時30分から始まりました。この日の探鳥会担当幹事の樋口会長から、開始の挨拶に続いてコロナ対策に関する愛護会の姿勢や、3密を避けるためのお願いなどがありました。また、早坂探鳥代表幹事から、望遠鏡を借りるときに使用する、配布したグッズの説明がありました。これは自分専用の透明なアクリル板で、接眼部に当てて用いる感染予防対策品です。これからの探鳥会にも忘れずにお持ちくださいますよう。

いつものように反時計回りで探鳥を開始し、まずは10日間以上滞在してくれているヘラサギの嘴を見て名前の由来に合点し、遠目ながら白鷺3種：ダイサギ・チュウサギ・コサギを確認しながら進みます。早速、干潟にトウネンとコチドリ、イソシギ、少し離れてオジロトウネンがいるとの声があがりました。が、体の色が地面に溶け込んでいて



ヘラサギ 品川睦生さん撮影

なかなか探せず、教える人も教えてもらう人も四苦八苦でした。次は、遠くのカモの群れと、その近くで一列に並んで餌を捕っているアオアシシギとツルシギの群れを観察。カモ達はこの時期、地味な上に、頭を水につけて採餌しているので種類のチェックに手間取りましたが、それはそれで楽しいものです。



カモを襲うハヤブサ 品川睦生さん撮影

ほぼ半周した辺りに広がる干潟でトウネンやタカブシギを見ている時に、シギが突然いっせいに飛び立ち、カモの羽音が聞こえ、群れが黒いかたまりになって動き始めました。ハヤブサがハンティングに来たのでした。『ハヤブサショー』の開幕でした。ハヤブサは急降下してカモの群れを追いますが、群れは低く飛んで近くの水面に逃れ、諦めないハヤブサの急降下と群れの攻防がしばらく繰り返されました。その後ハヤブサは息切れしたのでしょうか、干潟に降りてくれたので、落ち着いて観察できました。『若いハヤブサだから狩りも上手くないね』が、皆の感想です。

一段落ついた頃、目の前の干潟でヒバリシギを見つけました。ウズラシギ、アメリカウズラシギもいました。この2種は必ずしも毎年見られるとは限らないので格別です。どちらもヒシに隠れるようにうずくまっていた、ウズラシギがいる、いや、アメリカウズラシギだ、どっちだ、と、しばらくもめた後、両方いるのが分かって良かった良かった…。等々で、“とうとう”予定の終了時間を30分延長してしまう羽目となりました。

やや離れたところにエリマキシギ、アカエリヒレアシギもいて、シギ・チドリ類は12種となり、カモ類は6種と、予想を上回る出現に満足して、探鳥会は無事終了しました。今回の探鳥会は、ようやく再開に漕ぎつけたという感があります。準備にたずさわり、探鳥中もさりげなく気配りされていた方々の力が大きかったと思います。



半年ぶりに再開した探鳥会 辻 雅司さん撮影

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、シマアジ、オナガガモ、コガモ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、ヘラサギ、コチドリ、ツルシギ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、トウネン、オジロトウネン、ヒバリシギ、アメリカウズラシギ、ウズラシギ、エリマキシギ、アカエリヒレアシギ、トビ、ノスリ、アカゲラ、ハヤブサ、モズ、ハシボソガラス、ショウドウツバメ、コムクドリ、ハクセキレイ 以上33種

【参加者】 阿部真美、石塚 肇・鈴子、伊藤知佳子、今村三枝子、岩井 茂、白田 正、大表順子、小川正樹・範子、北山政人、栗林宏三、小谷内久江、近藤章子、品川陸生、渋谷公之、白澤昌彦、新城 久、杉村直樹、鈴木幸弥、高島 均・明美、高橋きよ子、高橋良直、高屋敷征子、立田節子、田中さちよ、田中 陽・雅子、田辺英世、辻 雅司・方子、鳥谷峰 修・心、中村 隆、成田京子、西尾京子、西原 祥・淳子・諒、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、本間卓也・裕美、道川富美子、南喜和子、本杉政司・朋子、横山加奈子、吉田慶子

以上52名

【担当幹事】 樋口孝城、道川富美子

野 幌 森 林 公 園

2020. 9. 13

【記録された鳥】 コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ゴジュウカラ、キバシリ、サメビタキ、コサメビタキ、アオジ 以上12種

【参加者】 石塚 肇・鈴子、伊藤知佳子、川村宣子、清野美恵子、瀬尾奈智子、辻 雅司・方子、辻田捷紀、道場優、富川 徹、長野隆行、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、藤田 潔、辺見敦子、松原寛直・敏子、三井 茂、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 以上23名
【担当幹事】 辻 雅司、中村 隆

宮 島 沼

2020. 9. 27

とやみね ところ
札幌市豊平区 鳥谷峰 心 (小学4年)

宮島沼の近くに行ったら、まずマガンが畑にいっぱいいてびっくりしました。その後、トビが魚をゲット！そしてトビが畑で魚を食べていました。

宮島沼にとちゃくしました。沼の近くに行き、そうがんきょうで景色をみわたすと、もうさっそくマガンが沢山います。会が始まってからほうえんきょうを見せてもらいました。すると、マガン、ヒシクイが盛り沢山。その中にはざっ種と思われるガンが！首にかけて頭は白く眼は黒。けれども羽などは薄い茶色でした。

カモ類もいたそうですが、私はあまり見られませんでした。見られたのはカルガモ、オナガガモだけです。カイツブリは何回か見たことがありますが、カンムリカイツブリはあまり見たことがないのでうれしかったです。



雑種と思われる頭部が白いガン 北山政人さん撮影

次にノスリです。ノスリは何回か見ているのですが、飛んでいるところは2回くらいしか見たことがなく、とてもうれしかったです。

その後にハヤブサ！これで2回目です。2回しか見たことのないハヤブサがいつもより近くで見られたのでこうふんしました。

その次にシジュウカラガン!!シジュウカラガンは見られないと思っていましたが、見られて良かったです。さらに写真もとれてうれしかったです。それにとっても可愛かったです。なので、もう一度見たいです。

また宮島沼に行きたいです。楽しかったので北海道野鳥愛護会に参加したいです。

【記録された鳥】 ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、カワアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、トビ、チュウヒ、ノスリ、アカゲラ、ハヤブサ、ハシブトガラス、ヒバリ、ムクドリ、アオジ 以上29種

【参加者】 阿部真美、石塚 肇、今村三枝子、白田 正、大垣 創、大浪達郎、北山政人、栗林宏三、小谷内久江、近藤章子、佐藤ひろみ、品川睦生、渋谷公之、鈴木幸弥、高島 均・明美、高橋良直、田中さちえ、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、富川 徹、鳥谷峰 修・心、馬場慎也・あゆ美・湊一朗・航之介、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、平田修二、藤田 潔、丸瀬文現・亜希子、山室ゆかり・しをり、山脇景子、吉田慶子、吉田知恵美、吉村 光 以上42名

【担当幹事】 北山政人、佐藤ひろみ

いしかり調整池

2020. 10. 3

【記録された鳥】 マガン、カルガモ、アオサギ、ダイサギ、コチドリ、トウネン、ミサゴ、トビ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、ハヤブサ、ハシブトガラス、ヒバリ、ハクセキレイ、カワラヒワ 以上16種

【参加者】 阿部真美、石塚 肇、井上 剛、白田 正、北山政人、栗林宏三、小谷内久江、渋谷公之、新城 久、鈴木幸弥、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、長谷川 功・伊都子、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、藤田 潔、道川富美子 以上22名

【担当幹事】 新城 久、樋口孝城

野幌森林公園

2020. 10. 11

札幌市厚別区 森田 路子

念願かなって手に入れた双眼鏡を手に、愛護会の探鳥会に初参加しました。時々野外観察会に参加していましたが、コンサート用のおもちゃの双眼鏡しかありませんでした。毎回私だけ「なんとなくわかる」レベルの置いてきぼりで、鳥の姿模様も見えず、名前は覚えられず、判別もできずで、上等な双眼鏡でじっくり見たいと願っていました。

デビューにふさわしい、青く澄んだ天高い秋晴れのお天気に恵まれ、近所の公園で練習した成果を出せるか楽しみにしていました。先生の後ろにぴったりくっついて何が出てきてくれるかしら、見逃さないぞと気合満点で歩き始め

てしばらく、鳥たちの声が聞こえ始めました。コクワの実もあり、虫も飛んでいます。一番手のコゲラの次は2羽のアカゲラが！赤いお腹が双眼鏡で見えました。ハシブトガラ、ヤマガラも美しい羽根を見せてくれました。あ、鳥！と追うと、この時期限定の実は枯葉の「葉っぱ鳥」でした。大沢の水辺にはオオバン、カイツブリ、オシドリたちもくつろいでいました。



秋晴れに恵まれた探鳥会 辻 雅司さん撮影

一番目に焼き付いたのは、真っ青な空に突き抜けた木に垂直にしがみついているアカゲラの背中です。頭の赤、黒、白のコントラストがくっきりはっきり。覚えてたの逆ハの字の白い模様もよくわかりました。悔しかったのは、ほぼ全員が見つけたアトリを1羽もとらえられなかったこと。双眼鏡を自分の目にするにはまだまだ時間がかかりますね。野鳥たちの美しい姿、羽根、細やかでかわいらしい目と動き、森林浴をしながらその世界を覗いていると、あっという間に楽しい時間が過ぎました。

当日ご案内くださった愛護会の皆様は、素朴な質問にも一つひとつ丁寧に教えてくださり、鳥や自然を愛する方々の懐の広さを有難く思いました。またコロナ対策も十分考慮くださり、安心安全な探鳥会でした。これからもたくさんの方の鳥たちに会えるよう、引き続きこの楽しい探鳥会の開催を願っています。この度はお世話になり、ありがとうございました。

【記録された鳥】 オシドリ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、オオバン、トビ、ノスリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、カケス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、アトリ、アオジ 以上27種

【参加者】 青木武男・あけみ、阿部 徹、井上 剛、今村三枝子、大表順子、小島俊幸、辻 雅司・方子、道場 優、鳥谷峰 修、長尾由美子、畑 正輔、早坂泰夫、福士一徳、藤田 潔、松原寛直・敏子、丸瀬文現・亜希子、道川富美子、本杉政司・朋子、森田康志・路子、山田正人・美鶴、山本育子、横山加奈子、吉田慶子、吉村 光 以上31名

【担当幹事】 道場 優、道川富美子

測量山 唐松平

2020. 10. 18

札幌市厚別区 齊藤 蓮 (小学5年)

ぼくは鳥が好きな小学5年生です。コロナの事もあり長らく探鳥会には行けませんでした。測量山でタカの渡りを観察する探鳥会があるということを知って参加しました。去年家族と来た時は天気が悪く、タカの渡りは観察できませんでした。今回測量山に着いた瞬間、去年とは違うことに気付きました。頭上をノスリが通過したからです。探鳥会には数分遅れたのですが、頂上の広場に行く途中、オオタカ等が通過しました。さらに、ウグイスの「チャッチャッ」という声も聞こえます。頂上の広場に着くとすごい景色です。集合場所の広場では到底見つけられないような上空のタカも見えるので、皆さんには頂上の広場に行く事を強く勧めます。ただ、ハイタカ属3種(オオタカ、ハイタカ、ツミ)の識別は難しい!でも、慣れてくると分かるようになってきます。その後もノスリ、オオタカ、ハイタカ等が渡っていきます。去年とは大違いです。また、ウグイス、カラ類、メジロ等もいたし、人気のシマエナガを見たという人もいました。それと、探鳥会では自力では絶対見つけられないような所にいるタカも、「〇〇の近くに××が飛んでいる」と教えてくれるので助かります。



渡っていくノスリ 早坂泰夫さん撮影

そして探鳥会もほとんど終わり、鳥合わせ中、ふと上空を見ると小型のタカが! 「何か飛んでる!」と言い、夢中で撮影していると、奥の方から「ツミの幼鳥」との声が。確かに翼指は5枚だし、ノドに線が入っています。漢字で雀鷹と書いただけあって小さかったです。そして探鳥会は終了しました。ただ午前中に帰られた方には申し訳ないのですが、探鳥会終了後すごかったんです。というのは、ミサゴが飛んだり、ノスリのタカ柱ができたり、オオタカ、ハイタカが近くを通過し、数も多かったからです。タカの渡りは運なので、粘ってみるのも良いと思います。

【記録された鳥】 ウミウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオジロ、アオジ

以上23種

【参加者】 阿部真美、石塚 肇、岩井 茂、岩井幸子、白田 正、大表順子、大浪達郎、河合千賀子、川村直裕、北山政人、小谷内久江、齊藤 桂・瞳・蓮・葵、佐藤香織、佐藤奈緒美、新城 久、田中 陽・雅子、田守真一・敦子、辻 雅司・方子、鳥谷峰 修・由紀・心、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、平澤路生、福島 文、藤田 潔、丸瀬文現・亜希子、本杉政司・朋子、吉見孝夫・紫乃、吉村光、鷲田善幸

以上41名

【担当幹事】 白田 正、北山政人

野幌森林公園

2020. 11. 1

【記録された鳥】 ヒドリガモ、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマガラ、ヤマゲラ、カケス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、ミソサザイ、ツグミ、カワラヒワ、マヒワ

以上23種

【参加者】 石井正訓、井上 剛、今村三枝子、小西美美枝、小島俊幸、高井さつき、高島 均、高柳松蔵・真由美、竹内 強、畑 正輔、早坂泰夫、藤田 潔、藤吉 功、辺見敦子、松原寛直・敏子、丸瀬文現・亜希子、森田康志・路子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子

以上24名

【担当幹事】 竹内 強、早坂泰夫

ウトナイ湖

2020. 11. 8

新型コロナウイルス流行の影響で中止しました。

野幌森林公園

2020. 12. 6

新型コロナウイルス流行の影響で中止しました。



新型コロナウイルス流行の影響で、1月の小樽港探鳥会は中止にしました。今後も同様の理由で中止の場合があることをご了承ください。

また、野幌森林公園で予定されている倒木撤去に伴う園内立ち入り禁止の場合も中止となりますのでご了承ください。

【野幌森林公園】2021年2月7日(日)

冬の野幌森林公園でキレンジャク、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥、キツツキ類、カラ類などを観察します。正午頃に大沢口に戻り、鳥合わせをして解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：JRバス 新札幌駅発（文京台循環線）

「文京台南町」下車 徒歩5分

【円山公園】2021年3月7日(日)

春間近の公園内でアカゲラやコゲラ、カラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。午前中で解散の予定です。

集 合：円山公園管理事務所前 9:00

交 通：地下鉄東西線「円山公園」下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】2021年3月21日(日)

北の繁殖地に渡っていくガン・カモ類や、オオワシ、オジロワシなどを観察します。湖畔をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃、ネイチャーセンターの駐車場で鳥合わせをして解散となります。

集 合：ウトナイ湖鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発（苫小牧行）

「ウトナイ湖」下車 徒歩3分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆雨具、観察用具、筆記用具などお持ちください。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

10:00~16:00 (土・日、祝祭日を除く)

鳥民だより

◆新型コロナウイルス感染防止対策について◆

9月発行の野鳥だより201号に「探鳥会再開に向けてのお願い」として、新型コロナウイルス感染防止対策を同封しました。マスク着用、アルコールによる手指消毒、連絡先明記の参加者カードの記入、スコープ使用時の透明アクリル板の配布、「密」防止のグループ分けなどが骨子になっていますので、熟読をお願いいたします。

◆新年講演会(50周年記念講演会)の延期について◆

新型コロナウイルス感染防止の観点から、2021年1月に開催予定でした、新年講演会(50周年記念講演会)を延期いたします。期日、内容については後日ご案内いたします。

◆野鳥カレンダー取り扱いの中止について◆

北海道野鳥愛護会名入りの野鳥カレンダーは、取り扱い部数の減少、コロナ禍における受け渡し機会の減少などの理由で、取り扱いを中止しました。

名入りでないカレンダーの購入については日本鳥類保護連盟の申し込みフォーム、電話、ファックス、メールで受け付けています。

<http://www.jspb.org/calendar.html>

電話 03-5378-5691 Fax 03-5378-5693

E-mail: okayasu@jspb.org

【新しく会員になられた方々】

高柳 松蔵・眞由美(江別市)

平澤 路生(札幌市東区)

表紙の鳥

ヘラシギ



鳥見をはじめて16~17年になりますが、シギ・チドリはどれもハードルが高くなんとなく敬遠していました。それが3~4年前から心変わりし、シギ・チドリの聖地石狩浜といしかり調整池に足繁く通うようになりました。とはいえ、まだまだシギ・チドリの奥深い世界の入門者です。今年もシーズンが待ちきれず、いそいそと7月から毎週のように通っておりました。それだけ通うとたまにご褒美があるものです。今年のご褒美は石狩浜の通称・三線浜に来たヘラシギでした。世界中で数百羽しかいないともいわれるヘラシギですが、今年9月3日と6日の2度も会うことができました。

(写真は9月6日撮影)

鈴木 幸 弥(札幌市中央区)

【北海道野鳥愛護会】年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <https://aigokai.org>